

芥川龍之介研究

濱 崎 隆

序

新人作家であった頃の芥川の小説は、一般読者には評判がいい一方で、その虚構性、面白みが理解されずに自然主義作家から辛辣な批評も受けていた。例えば田山花袋の「手巾」に対する次のような批判がある。

かういふ作の面白味は私にはわからない。何処が面白いかといふのかといふ気がする。この前の『芋粥』でも何に意味を感じて作者が書いてゐるのか少しもわからなかつた。対照から生ずる面白味、気のきいたといふ点から生ずる面白味、さふいふもの以外に、何があるであらうか。^(注)

(「一枚板の机上―十月の創作其他」『文章世界』大正五年一月)

このような酷評がありながらも、芥川の小説は多くの

人々に支持されたのである。その結果、早くから人気作家としての地位を得ることもでき、現在においても読者は絶えないのである。

では、現代を舞台とした「手巾」という虚構世界はどのような意味があつたのであろうか。成立背景、研究史を振り返りながら、その意味を改めて考えてみたい。

第一章 成立背景と素材

第一節 発表前後と久米との関係

「手巾」は一九一六年(大正五)十月『中央公論』に発表された。当時芥川は二四歳で、同年七月、東京帝国大学文科大学英吉利文学科を卒業している。

その頃の執筆活動をみると、在学中は、大正四年四月

「ひよっとこ」十二月「羅生門」とともに『帝國文学』に発表している。しかし、これらの作品には発表当初文壇人の言及はまったくなく、黙殺されている。大正五年二月には、第四次『新思潮』の創刊号に「鼻」を発表。この作品を夏目漱石が芥川宛の書簡で、「敬服しました、あゝいふものを是から三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます然し『鼻』丈では恐らく多数の人の眼に触れないでせう触れてもみんなが黙過するでせうそんなことに頓着しないでずん／＼御進みなさい群衆は眼中に置かない方が身体の薬です」と激賞し、芥川は自信を得たと思われる。また、この頃には塚本文との結婚を考えだしたと思われる。五月「虱」（『希望』）、八月「仙人」（『新思潮』）、「野呂松人形」（『人文』）を発表。『新思潮』は月刊誌で、同人は五人しかいなかったため、この頃には雑誌の依頼の仕事もあり原稿に追われる生活であった。九月には「芋粥」（『新小説』）、「猿」（『新思潮』）を発表。そして、十月『中央公論』に「手巾」の発表となる。十一月からは一高教授畔柳都太郎の紹介で、海軍機関学校への就職のため横須賀に行き、十二月から正式に海軍機関学校教授嘱託に就任する。

次に「手巾」は何を素材とし、どのような経緯で発表されるに至ったのかをみていきたいと思う。

「手巾」の直接の素材は久米正雄から得たものだと思う

れる。「手巾」が発表される約二ヶ月前、大正五年八月号の『新思潮』に久米正雄の「母」という短篇小説が発表された。「手巾」の主人公である「長谷川謹造先生」が新渡戸稲造を主人公にしているのはよく知られているが、久米の「母」も新渡戸稲造をモデルとする作品である。芥川はこの「母」という作品を意識して「手巾」を書いたと考えられる。

大正五年七月に大学を卒業した芥川と久米は、八月十七日から九月上旬まで千葉県一の宮に滞在している。一の宮は、千葉県の東南部に位置し、明治以降は避寒・避暑の別荘地となり、海水浴場としても知られている。芥川は大正三年にも府立三中時代の友人に紹介されて一の宮に滞在したことがある。大正五年も、府立三中の二年後輩である陸山金左衛門の紹介で一の宮館という旅館に滞在した。その時芥川は蔭山宛に書簡を出しており、その中で、「僕はここへ来る時に二つの計画を立てた。一つは小説を五つ六つ書く事で、一つは頭の毛をのばす事である。」と書いている。このことから、一の宮滞在の目的は、小説を書くことであつたといえる。

本を読み、海で泳ぎ、小説を書こうと思って久米と話をしているうちに、「母」の素材や内容に話が及び、同じ素材で作品を書くことを思いついたと思われる。

では、「手巾」「母」の共通のモデルとなっている新渡戸稲造と芥川・久米はどのように関連していたのだろうか。

新渡戸稲造は、明治三十九年九月から大正二年四月まで一高校長の職に在る。芥川らの一高入学は明治四三年九月で、卒業は大正二年七月であるから、彼らの在学中と新渡戸の在任はほぼ重なっている。すると、校長としての新渡戸に接する機会があったはずであるし、芥川自身、後年の講演で新渡戸の授業を受けたことを語っている。

さらに、大学入学後、より創作に近い時点で言えば、大正五年三月、英文科の外人教授ジョン・ローレンスの葬儀の席で、彼らは新渡戸の英語による弔辞を聞いている。

第二節 「母」と比較して

「手巾」と同じ素材で書かれたと思われる久米の「母」という作品を見ていきたいと思う。

物語は一高入学試験当日の朝のことである。《学校に別して出勤を要する》わけではないが、英語の試験の日であるから、受験生の様子に《参考になる点、又は他日講堂の訓話か人生訓の材料にでもなる事は無いか》と、先生は学校に向かう。《いつも時間を守りつけてゐる先生》は、家用に手間取って遅れたのを《不快》に思いながら校門に着

く。すると、そこに《一人の清楚な中年の婦人》が立っているのが見える。いったんやり過ぎた先生は、《何か面白い事情があるかも知れない》ので、思い直して用件を尋ねる。婦人はある受験生の母親で、病気を押し受ける息子の身を案じて、こうして待っているのだと言う。その話を聞いて先生は《教育家の感動を抑へ切れ》なくて、教室を回って、その受験生を見つけ、『どうだね。体の具合は何ともないかい。』『ちやあ気をつけてしつかり書き給へ』と声をかける。そして、その無事を校舎外の母親に伝える。婦人は《笑ひを湛へてお辞儀》する。次に本文は以下のように続く。

先生は只何となく嬉しかった。而して殊に又一つの訓話の材料が出来たのを思ふと嬉しさが二倍するのを感じた。

その後矢田部先生は講堂で右の話を予定通り訓話にした事は云ふ迄も無い。

それを聞いた《当時の学生の自分》は、それを自分の母親に話す。その母親は『私には逆もそんな真似は出来ないよ』と微笑を洩らす。そこで物語はおわる。

「手巾」と比較すると、先生を揶揄の対象としている点で一致している。例えば、《吾が流暢な外国語に聞き惚れて見たいと云ふ、可愛い、欲望を持つてゐた》り、《有名

な人が自分の名を云ふ時に感ずる一種の誇り」を感じながら《私は矢田部ですが。》と付け加えたり、婦人が安心したことよりも《訓話の材料》ができたことに《嬉しさ》が《二倍する》のを感じたり、作者は明らかに先生をからかっている。「手巾」においては《曲りなり》の《興味》でストリントベルクを読んだり、顔では笑っていたが全身で泣いているの気づいて《満足》したり、西山夫人のことを奥さんに話して《満足に思つた》りしている。「母」と「手巾」は主人公である先生を同じように揶揄しているのである。

また、「母」の《日本の婦人にのみある一種の道義的連想を伴ふ、一種の美》を持つ《清楚な中年の婦人》と、《日本の女の武士道》精神を持ち《賢母らしい婦人》である西山夫人は、よく似ている。

浅野洋氏は、「手巾」と「母」を比較して次のように指摘している。^(注8)

作品全体の構成でみるなら、「母」も「手巾」も教育家としての令名高い先生（いずれも新渡戸稲造を彷彿とさせる）が、子を思う母親としての情を内に秘めた日本的な中年婦人の礼節ある態度に感じ入り、そこに道徳的な意味を見出し、日頃の自説の傍証とする、という点では、ほとんど同工異曲の二篇だといえよう。

「母」では、その体験を早速《訓話》の材料として多くの一高生に語りかけ、「手巾」では、愛妻ひとりに《熱心な聴き手を見出す》す、という聞き手の多寡に相違はあっても、倍加する《嬉しさ》を感じた《長谷部博造^(注9)》と《満足に思つた》《長谷川謹造》との間に落差はほとんどない。

もっともな指摘であろう。指摘の通り全体の構成についても、登場人物の性格についてもよく似ている。この二篇の類似性は単なる偶然というより、明らかに芥川が「母」を意識して「手巾」を書いた結果だろう。

第三節 「武士道（小品）」について

「手巾」には「武士道（小品）」と題する草稿がある。その冒頭は次のようにはじまる。

武士道（小品）

久米に献ず

東京帝国大学教授 長谷部博造先生は ヴェランダの藤椅子に 楽々と腰をかけて ストリントベルグのドラマトウルギイを読んでいた。

「久米に献ず」というサブタイトルがあり、主人公の名前が「母」の初出時の主人公の名前と同じ「長谷部博造」である。このことは、この作品が久米に材料を提供してもらい、「母」を意識して書かれたことを示しているだろう。浅野氏は、「久米に献ず」は「茶目っ気たっぷりな知己特有の挨拶であり、久米に対する芥川の軽い挑撥の気分を示すもの」と指摘している。至言であろう。このサブタイトルが示すように、この作品は久米への個人的な競争意識が多分にあると思われる。

久米は『新思潮』十月号の「編輯の後に」に次のように書いている。

芥川の小説「手巾」が中央公論にでる。それは一體新思潮のために書き出したのであつたが、別に書こうとした材料が、どうも充分発酵しないで、それを中央公論へ廻したのだ。(中略)新思潮を読んで呉れる讀者は、大抵中央公論も見ると、新理智派とも称すべき彼の小説中、殊に文明批評を狙った「手巾」の如きは、殊に注意して読んで頂き度い。

この久米の言葉も参考にして成立経緯を考えると、芥川はまず久米の「母」を読んで、そのことについて一の宮などで久米と雑談しているうちに、自身も一高時代に接したことのある新渡戸稲造を素材として作品を書くことを考え

た。それで、「武士道（小品）」を『新思潮のために書き出した』。しかし、当時文壇の登竜門と称されていた『中央公論』のために『書こうとした材料が、どうも充分発酵しない』ので、「武士道（小品）」に手を加え、主人公の名前を変え、「手巾」と改題して『中央公論』に発表した。このような経緯で発表に至ったというのが定説になっている。このような経緯で「手巾」が成立したのだと考えると、この草稿はもともと『新思潮』用の原稿ということになるが、前に述べたように「久米に献ず」というサブタイトルの存在や「母」と主人公の名前が同じことがそれを示しているだろう。それは、同時に「手巾」との相違点であるわけだが、草稿と「手巾」にはもう一つ大きな相違点がある。それは、作品の末尾部分の有無である。

「手巾」の末尾部分である「搔いた手は、本を持っている手である。」から「ちつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……」の部分が「武士道（小品）」には無い。この「手巾」の末尾部分は、作品全体の解釈においても重要な個所である。末尾部分の解釈次第で作品全体の解釈が変り得るので、この部分は次章以降で取り扱いたいと思う。

第四節 新渡戸の「武士道」との関連

「手巾」の主人公のモデルとされる新渡戸稲造は、明治三二（一八九九）年、アメリカ滞在中に“Bushido, The Soul of Japan”を発表している。翌明治三三年には東京の裳華堂より出版された。日本語訳の最初のものは、明治四一年の櫻井鷗村による訳本だとされる。それが、『武士道』という邦題である。新渡戸の著書は他に『修養』（明治四四年九月）、『世渡りの道』（大正元年十月）、『一日一言』（大正四年一月）などがあり、多くの版を重ねている。「母」や「手巾」が発表された大正五年には、新渡戸稲造の名は、それら教訓書のベストセラーズの著者として盛名をはせていた。

また、前に述べたように芥川は、一高校長としての新渡戸に直接触れる機会もあったわけであるから、「武士道（小品）」または「手巾」を書くにあたって、新渡戸の代表的著作に目を通したと考えられる。とくに『武士道』は、その名のとおり武士道についての新渡戸の見解が示され、「手巾」の草稿が「武士道（小品）」と題されているのかわかるように、何かしら関連があると思われるので、見ていきたい。

『武士道』第十一章「克己」に次のような例が出されて

いる。^(注10)

最近中国との戦争（日清戦争）に際しある連隊が某市を出発した時、多くの群集が隊長以下軍隊に訣別するため停車場に群れ集うことを私は思い出す。この時、一アメリカ人が、声高き感情の爆発を予期しつつその場所に行つて見た。それは全国民そのものがひどく興奮していたし、かつその群衆の中には兵士の父、母、妻、愛人等もいたからである。しかるにこのアメリカ人は奇異の感を抱いて失望した。別れを告げ、ハンカチーフを振る者なく、一語を発する者なく、ただ深き沈黙の中に耳をすませばきよき嗚咽の洩るるを聴くのみであった。

これは、『挙止沈着、精神平静であれば、いかなる種類の激情にも擾れない』日本人の一例であるが、アメリカ人の理解できない誇るべき日本人の態度として、新渡戸は肯定しているのである。さらに、次のように続く。

家庭生活においてもまた、親心の弱さに出ずる行為を気づかれぬように、襖の蔭に立ちながら、病む児の呼吸に終夜耳を澄ませた父親がある！臨終の期にもその子の勉学を妨げざらんがために、これ呼び返すことを抑えた母親がある。我が国民の歴史と日常生活とは、ブルータークのもつとも感動すべきページにも善

く匹敵しうる英雄的婦人の实例に充ちている。

また、同じ「克己」の章に以下のような一節がある。

じっさい日本人は、人性の弱さが最も酷しき試煉に
会いたる時、常に笑顔を作る傾きがある。我が国民の
笑癖についてはデモクリトスその人にも優る理由があ
ると、私は思う。けだし我が国民の笑いはしばしば、
逆境によって擾されし時、心の平衡を恢復せんと努力
を隠す幕である。それは悲しみもしくは怒りの平衡錘
である。

《英雄的婦人の实例》とはまさに、西山夫人であり、
《最も酷しき試煉に会いたる時》に作る笑顔とは、自分の
息子の死を語りながらも口角に見せる西山夫人の微笑に相
当する。このように考えると、「西山夫人」は、新渡戸が
『武士道』で理想とした常に感動の抑制のできる、または、
心の平衡を保とうとする日本的な態度を持ち得た人物とし
て芥川が用意したのではないかと思われる。

第二章 研究史

この章ではこれまで「手巾」がどのようなように解釈されてき
たのかを整理しながら見ていこうと思う。

まず、「手巾」の主題についての言及の早くは、吉田精
一氏のものが^(注1)ある。

武士道乃至それをかこむ封建的観念に対する皮肉を
主題としたのである。文明批評としてはつつこみ方が
足りず、作者自身も問題だけを出して、身をひいてし
まつてゐる観があるが、気の利いたまとまりのよい短
篇である。

登場人物の細かな分析はないが、作中の「先生」を「橋
梁」とは名ばかりの伝統主義にとらわれた人物として描き、
そこに封建的観念に対する皮肉があらわれていると指摘し
ている。また、前章で引用した『新思潮』十月号の「編輯
の後に」において、久米が「手巾」の狙いを「文明批評」
としたためか、「文明批評」としての評価がなされている。
久米が「文明批評を狙った」と言ったのは、芥川からそ
の意図を直接聞いたのか、久米が「手巾」を読んで感じた
のかはつきりしないが、芥川に近い久米の発言であるため、
その後も「文明批評」としての「手巾」が評価されること
となる。

吉田氏とさほど変わらない見解として、片岡良一氏のも
のがある。^(注2)

片岡氏は「この作は武士道というものに対する軽い批判
が盛りこまれている」として、「武士道風——あるいは封

建時代風の感情をおし殺して生きようとする態度と、それをそっちょくに、自然のままに流露させるのをいいとする近代風の考え方との、対決を取り扱ったことになる」と論じている。

また、先生の最後の動揺について、

ストリントベリも顔は笑いながら手は悲しんでいる——のか、それとも怒っているのかわかりませんが、とにかくそういう二重の意味を持つ演技を嫌ったのでしよう。それに気づいた長谷川先生ももう一度はっと思つて、これはうっかりこのおかあさんの態度に感心することもできないと感ずるようになったのです。

と説明し、芥川の「西山夫人」に対する見方について以下のように述べている。

(作者が)武士道風の矯飾主義に賛成できなくなつていたのである気持ちは、それに強く同感しようとした長谷川先生の気持が、作品の最後にいつてはぐらかされていることによつて、明瞭に知ることができるとではないかと思ひます。

この片岡氏の論では、西山婦人の示した態度を《武士道の矯飾主義》だと解し、それをハイベルク夫人の《二重の演技》と同一視している。また、芥川自身は西山夫人の態度を否定的に捉えているという事になる。

次に、三島由紀夫氏の以下のような解釈がなされた。^(注13)

これも美談否定物で、末尾には又なくもがなのレフレクションがついてゐるが、ここには作者自身の云つている「型」の美がある。そして人生と演技とが相渉る部分について極度に潔癖な自意識家の作者は、「手巾」では、無意識のうちに、西山夫人のステレオタイプな人生的演技を、一つの静止した形で、「型」の美とみとめてゐた。この型の美が、能楽の或る刹那の型のやうな輝きを放つて、コントの小さな型式と融和したのである。

この解釈では、末尾の部分を《なくもがなのレフレクション》とし、片岡氏が《武士道の矯飾主義》として芥川が批判しているとした西山夫人の態度を、《ステレオタイプな人生的演技》として《無意識のうちに》《型》の美とみとめてゐるとしている。

この三島氏の解釈に対し、海老井英次氏は、「西山夫人への注目、作品の読み方としては極めて明快なものを提示し得ており、作品論の領域を広げたものと言える」としながらも、西山夫人の「実人生を演劇に還元してしまつたところ」に成つた、恣意的な論に他ならない」と評している。^(注14)確かに「文明批評」としての視点を認めないのは、多くの要素を捨て去りすぎた観がある。

続いて、三好行雄氏の次のような論がある。^(注15)

伝統主義との関連を説かれることもあるように、近代の醒めた眼による武士道の批判というテーマは明確である。にもかかわらず、西山夫人は美しい。子供を死なせた悲しみを、膝のうえの一枚の手巾で耐えながら微笑する夫人の演技は、近代の批判精神から型(マニール)として斥けられたにしても、彼女はなお美そのものなのである。

三好氏もまた、《子供を死なせた悲しみを、膝のうえの一枚の手巾で耐えながら微笑する夫人の演技》を、《近代精神から》《斥けられ》る型、つまり、ストリントベルグの非難するハイベルク夫人の二重の演技と同一視し、主題は《武士道の批判》だとしている。この点では、片岡説と一致する。しかし、その後、《にもかかわらず、西山夫人は美しい》《なお美そのもの》とし、三島説をも継承する。

西山夫人の態度とハイベルク夫人の二重の演技とは、異質のものであると主張したのは、磯貝英夫氏の次のような論である。^(注16)

西山夫人とハイベルク夫人のアナロジイはやはりそれほどどうまくは対応していないのである。悲しみを真剣に隠している西山夫人の笑顔術と、ハイベルク夫人

の見せるための演技とは、簡単に一つにくくりうるような性質のものではない。

また、「性質」の違いについて次のように説明している。西山夫人の微笑術が、武士道における自己抑制的価値観を土台として養成されてきた表現術——型であることはたしかである。しかし、この場合、一方に、児を失った母親の悲しみという厳肅な実感が実在しているのだから、この微笑術が演技になる危険はきわめて少ないと言わなければならない。(中略) そうゆう実質を持たないハイベルク夫人と西山夫人との差はやはり大きいのであって、この差を無視する類比は浅薄だと言わざるをえない。

このように、西山夫人の示した態度とハイベルク夫人の二重の演技を同一視するのを批判している。その後、《実感が実在している》西山夫人の態度を長谷川先生が、一般化して《内部からにじみ出てくるものが失われ、外部からの力に依存して型が保たれるとき、それは美でもなく、倫理でもなくなる》危険が含まれる。そのようなことに気付くことなく、《武士道倫理をもって世界の調和をはかるうとするような一元的なゆめはどうも閉口だ——芥川の感覺実質は、多分こんなところであつたであらう》と磯貝氏は指摘している。

また、《武士道とさうしてその型と》という一般的ななぞをぶっつけて先生自体はひっこんでしまうのだから、読者は対象を見失ってマゴマゴする」と末尾の部分のあいまいさにも言及し、次のように分析している。

先生の不安は、西山夫人についての自分の判断が「臭味」というような思いがけないことばと衝突した結果、ぐらつきだしたところに起こっているとしたか読めない。すると、読者の懷疑の焦点は西山夫人に向かつて、先生から離れるようになる。ところが、先にも述べたように、西山夫人それ自体を臭味と結びつけることは、論理的にできない。そこで、読者はまた混乱するのである。

その一方で、西山夫人に対する《懷疑的な観念のゴタゴタなどはだれも心に残していない》ので、《作品の総合的な印象としては、西山夫人のけなげな姿だけが、まともな形で心に残るのである》と、三島氏にも同意している。

その後、「手巾」は、磯貝氏の論を踏まえて論じられることになる。海老井英次氏の次に挙げる論もその一つである。^(注)

西山夫人とハイベルク夫人の、手巾を握りしめる所作は、外見上は確かに同一であるとしても、一方は「一般道徳上」の問題であり、他方は「演出法」に属

するものであり、その次元において決定的な相違があるのは当然で、作者もその点に言及しており無自覚なのではない。(中略)この二者はまったく評価基準の異なった次元にそれぞれ属しているのであり、したがって両者の比較自体がもともと意味をなさないのである。(中略)西山夫人とハイベルク夫人との次元の異なりを無視して、両者の所作の同一性へのみ心を奪われて、両者に東西の断層を見出して、目覚めているのが長谷川先生なのである。

このように、海老井氏は、西山夫人の態度とハイベルク夫人の演技を同一視し、《演劇と実人生とを混同するとうい、極めて未分化の精神の所有者、すなわち長谷川先生が問題の核心》であると論じている。また、芥川の狙いは、西欧的なものと日本的なものとの調和を信ずるコスモポリタン長谷川先生を戯画化することによって、その調和自体が戯画的なものでしかないという批判であったと説いている。このように「手巾」の解釈、とくに、作者が西山夫人を肯定的に捉えているのか、否定的に捉えているのかは、定まっていない。

次にとりあげる比較的新しい浅野洋氏の論は、これまで^(注)の「手巾」論を確認しながら、西山夫人の態度には「美」を認めない。

もし仮に西山夫人が《美しい》としたら、それはま
ず作品の現実が基本的に「長谷川先生の眼」を通し
て捉えられた世界だったからであり、しかも、西山夫
人は新渡戸稲造が《美しい》と信ずる「型」を忠実に
なぞるダミーとして作者が注意深く仕立てた典型的形
象だったからである。「手巾」に即していえば、西山
夫人を《美しい》と感ずるのは、誰よりも長谷川先生
その人であり、その《美》に《倫理的背景》を見出だ
して《満足》を覚える長谷川先生の「視座」こそ、作
者の疑わしげな眼によってまず問われる当のものであ
る。(中略)そうした人間的な悲しみの内実をそっく
り抜きにしたまま、西山夫人の態度を武士道の倫理的
な「型」を顕在するものとみなし、日頃の自説の
証左へと簡単に付会してしまふ安直さと御都合主義は、
おのずとその《倫理》が内包する偽善性を露呈させる。
このように、西山夫人の《美》は、倫理が含む偽善性を
暴くために長谷川謹造もしくは新渡戸稲造の眼にかなう
《美》として作者が用意したものであって、決して作者に
とつての《美》ではないとしている。結論として、この作
品は、《旧世代に属する「令名ある教育家」を血祭りにあ
げ》《知的倨傲を誇る新世代の青年が、同じ世代の《幕開
け》を高らかに告知するいかにも明解な作意通りの一篇

だった》と結んでいる。

次にとりあげるのは浅野氏と同じ時期に発表された笠井
秋生氏の論で、同じく西山夫人の態度に「美」を認めてい
ない。

〈眼には、涙もたまつてゐない。声も平生通りであ
る。その上、口角には、微笑さえ浮んでゐる。〉

これが、息子の死を語っている時に、西山夫人が示
した態度のすべてであるならば、まぎれもなく武士道
である。だが、そうではなかった。西山夫人は顔にこ
そ感情を表していなかったが、手巾を緊く握りしめる
という動作によって、悲しみの感情を外に表していた。
作者も、〈顔でこそ笑つてゐたが、実はさつきから、
全身で泣いてゐたのである〉と書いている。これは、
武士道でなく、武士道の型である。武士道の表面的な
模倣にすぎない。この西山夫人の武士道の型を、長谷
川先生は武士道と解したのである。

「手巾」の主題は、従来論じられてきたように、武
士道に対する皮肉や批判だと読めないこともない。し
かし、この作品における芥川の真の意図は、武士道の
型を武士道だと信ずる長谷川先生を諷刺することであ
った。

西山夫人は《手巾を緊く握りしめるという動作によって、

悲しみの感情を外に表していた》ために武士道の型であつて、《武士道の表面的な模倣にすぎない》とされている。

この引用の前に笠井氏は「型」という言葉について言及し、ストリンドベルグが「わざとらしいやり方、うわつらだけの技巧的模倣」などの悪い意味で「型」という言葉を使用していると論じている。したがって、武士道においても「型」になつてしまつてることが問題であると説き、
〈「型」の美〉を認めている三島氏や三好氏の論を否定している。

第三章 作品分析

第一節 長谷川先生

これまでの「手巾」論で共通した解釈となつてゐるのは、主人公の「長谷川先生」は揶揄の対象であるということである。

例えば、《曲りなり》の《興味》でストリントベルクのドラマトゥルギーを読む先生が、梅幸を知らないことが暴露される。また、作者は岐阜ちようちんとドラマトゥルギーをとりあげ、《日の長い初夏の午後》を形容しつつ、

「しかし、かう云つたからと云つて、決して先生が無聊に苦しんでゐると云ふ訳ではない。さう解釈しようとする人があるならば、それは自分の書く心もちを、わざとシニカルに曲解しようとするものである。」と注釈を加える。さらに、待つてゐる客より、客を待たせてゐる先生の方が待遠しいと言ひながら、《もつとも、日ごろから謹厳な先生のことだから、これが、今日のような未知の女客に対してでなくとも、そうだということは、わざわざ断る必要もないであらう。》と皮肉な説明をしている。

その他には、先生は《時刻をはかつて》応接室に行き、客は《先生の判別を超越した》着物を着ている。西山夫人が全身で泣いることに気付いた先生は、《見てはならないものを見た」と云ふ敬虔な心もちと、さういふ心もちの意識から来るある満足とが、多少の芝居気で、誇張されたやうな、はなはだ、複雑な表情》をし、《眩しいものでも見るやうに、稍、大仰に、頸を反らせながら、低い、感情の籠つた声》で慰めの言葉を言う。

このような作者の視点を、磯貝氏は、《完全な見下ろし筆法である》と言つてゐる。この指摘通り、作品を通して、作者の視点はかなり高いところから主人公を見下ろしている。社会的地位もあり、世間から尊ばれている人物を新しい観点から戯画化することが、芥川のこの作品での主な目

的であり、その点に限れば成功している。

第二節 西山夫人

では、「西山夫人」は作中でどのように描かれているのだろうか。このことについては、前章で述べたようにこれまでも解釈に揺れがある。

片岡氏は、ハイベルク夫人の《二重の演技》と西山夫人の態度を同一視し、作者は《武士道の矯飾主義に、賛成できなくなっている》とした。それに対し三島氏の論は、作者は、《無意識のうちに、西山夫人のステロオタイプな人生的演技を一つの静止した形で、「型」の美とみとめてゐた》と全く逆の解釈をしている。しかし、この三島氏の論は、作品全体にわたっている長谷川先生への皮肉などを全く無視しており、海老井氏の指摘のように、個人的な美的価値観に基づいた恣意的な論に他ならない。そのあとの三好氏は、《武士道の批判というテーマ》でありながら、《彼女はなお美そのもの》とした。

三島氏や三好氏が西山夫人に《美》を認めるように、多くの読者は、一方的に否定的存在として捉えることはできないであろう。彼女は意図的に悲しみに包まれた母親を演じているわけではないのである。三島氏が、作者は《無意

識のうちに《「型」の美とみとめてゐた》と言つてしまえば、論拠もはっきりせず、恣意的になつてしまふが、読者の実感として《美》を感じるかどうかは別にして、西山夫人を、そしてその態度を否定することはできないと思う。

吉田氏が指摘するように、伝統主義的なものを否定し、新しい思想、自由な生き方を肯定する気持が芥川自身にあつたにせよ、外見的には伝統にとらわれながらも、胸中で息子の死という悲しみを抱えている夫人を否定できるであろうか。どのような表現をするかという問題以前に彼女の中には悲しみがあるのである。確かに外見上伝統主義的でも、その表現に関わらず、内実の悲しみをくみ取ることが本當の自由さではあるまいか。もし、彼女が泣き喚いても、彼女の悲しみに変化はないわけで、そのような場合でも、彼女の悲しみは否定されるべきではない。

しかし、作中の長谷川先生にとっては、もし、彼女が泣き喚けば、彼女はただの迷惑な来客になりはしないだろうか。彼女のこれまでの慣習にならつて表現した武士道的な態度を先生は氣に入つたわけであり、そのことを一般化し、訓話化し、内実とは無関係に形骸化してしまうことが問題なのである。

笠井氏は、西山夫人の態度を《武士道ではなく、武士道の型である》と説き、否定しているが、彼女が武士道であ

ろうが、その型にすぎないであろうが、それは些細なことである。むしろ、その型か、そうではないかに拘泥して生きる事が、旧時代的な生き方であり、芥川が肯定するのは、外見上の差違に関わらず、人間を理解しようとする自由さである。それが、長谷川先生には欠如しているのではないか。

西山夫人は《美》ではないかもしれない。また、《美》である必要もない。そのような個人的な美的価値観や表面上の態度に関わらず、悲しみの中にあるのであり、それを否定することは誰にもできないのではないか。もし、感情を自然に吐露する自由な生き方ではないと非難すれば、それは「新しい型」で本当の悲しみを否定することになってしまう。

また、西山夫人は確かに長谷川先生の価値観に適う人物として芥川が用意したものであるが、ただそれだけの理由で否定的に捉えられるものではない。武士道的振る舞いのために、西山夫人の本当の悲しみは一般化、訓話化されて、ある時は美化され、ある時は否定される。このように考えると、西山夫人は長谷川先生の観念の中で振り回されるわけで、彼女には何の非もない。彼女にあるのは息子を亡くした悲しみだけである。

第三節 作品の完成度と主題

芥川自身は、「手巾」をどのように評価していたのだろうか。いくつかの書簡にこの作品に関する言及がある。

発表の年の九月二十五日付、秦豊吉宛の書簡には次のようにある。

中央公論へは新渡戸さんをかいたので社会的反響が僕にとつて不快なものではない事を祈つてます作としてはグルードで駄目

発表後、十月八日付の井川恭宛の書簡では次のように書いている。

手巾は僕はそんなに得意ではない が世評はいい この二つの書簡からは、芥川の自信は伺われず、むしろ、新渡戸稲造をモデルにしたことの世間の反応を心配し、作品として「羅生門」「鼻」より悪いとされているように思える。

しかし、次に挙げる十月二十四日付の原善一郎宛の書簡には芥川の安堵が伺われる。

この頃僕も文壇への入籍届だけは出せましたまだ海のものとも山のものとも自分ながらわかりません

これは、『新小説』九月号に「芋粥」、『中央公論』十月号に「手巾」をのせて、世間の反応を感じての芥川の気持

だと考えられる。「手巾」は、発表当時どのように評価されたのであろう。

肯定的な評価としては次のようなものがある。

中央公論「手巾」（芥川龍之介氏）一番短いがこの一篇を最も面白く読んだ、（中略）其処には見逃す可らざる或る物がある、それは云ふまでもなく驚くべき程度にまで、巧なる皮肉である。長谷川謹造とは某博士と一読して明らかであるが故か、私は二度繰返して読んだが、氏の筆の力は驚嘆に値する、私は先月「芋粥」（新小説）を読んで氏の才筆に驚いたが、今またこの一篇を読んで更に氏の有つてゐるものに驚かざるを得なかつた。^{（注20）}

（十東浪人「十月の雑誌」『東京日日新聞』大正五年十月十日）

先月の「新思潮」に載つた「芋粥」などよりずっといい。或は、この作者の逸品の一たる「酒虫」などよりも、その作品の渾然として何等の破綻をも見せない点に於いては、寧ろ勝れたところが多いかも知れない。例に依つて、書き方が睨つきりして、何処にも危なかつかさが見えないばかりではなく、与へられた題材を消化して、思ふところを平気でぐんぐん書いてゆく手

腕は、殆んど新進の作家とは考へられないほど、老巧を極めたものである。^{（注21）}

（赤木桁平「十月の創作」『読売新聞』大正五年十月十日）

このような評価があつたために、芥川は『入籍届だけは出せました』と言えたのであろう。しかし、自分自身としては、決して自信作ではなかつたので、『作としてはグールドで駄目』としているのである。「グールド」とは、フランス語の *bonnet* で、かじかんだという意味と考えられる。では、どのあたりが『駄目』なのであろう。

まず、この作品は『中央公論』に発表されたが、第一章で取りあげたように、もともとは『新思潮』用の原稿として書かれた「武士道（小品）」というものであつた。しかし、『中央公論』用の作品が充分に発酵しないために、『中央公論』用の原稿として、訂正され、「手巾」に仕上げられた。

この成立過程から既に無理があるのではないか。もともとこの「武士道（小品）」という作品は、個人的な競争意識が強かつた。素材、「久米に献ず」というサブタイトル、一高時代に直接触れた新渡戸稲造、それに『新思潮』という発表の舞台。仲間内を意識して執筆されたのは確かだろう。

しかし、『中央公論』に発表となると、文壇の注目度も違ってくるはずであるし、主題としてもう少し社会性も必要である。そこで、ある程度の修正が加えられたが、必ずしも成功してない。その結果、芥川自身『駄目』と感じていたのだろう。

吉田氏なども、もちろん、その物足りなさを感じており、『文明批評』としてはつつこみ方が足りないと指摘している。また、その後の研究においても、「文明批評」としての未熟さを説く論が続く一方で、三島氏のような論も提出され、西山夫人に関する解釈も一定しない。

『中央公論』に芥川がはじめて書いた作品であるということもあり、少し過大にみられているようである。しかし、最近では、浅野氏の論のように、『知的倨傲を誇る新世代の青年が、同じ世代の〈幕開け〉を高らかに告知するいかにも明解な作意通りの一篇だったといえる』と「文明批評」という見地から一歩退いて肯定的に捉える意見もみられる。これまでの解釈の揺れをみると、浅野氏の言うように、『明解』で『作意どおり』であるとは思えない。しかし、旧世代にとっては『令名ある教育家』である先生を、地位や名誉に惑わされず冷静で客観的に見下ろして、その至らなさを皮肉たっぷりに捉える。それを、虚構空間に作り上げるのが芥川の意図であったように思われる。

結び

「手巾」は、発表当時自然主義の作家から酷評を受けたが、それは、「手巾」が自然主義の作品と大きな違いがあったためである。若い芥川が求めたものは、完成された虚構世界であった。「羅生門」などは、説話という過去の舞台をもとに、現代的知性をもって作られた虚構世界であった。一方、「手巾」は、現代を舞台とし、一読してわかるような実在の人物をモデルとしている。現実をみつめながらも、自然主義的に表現するのではなく、フィクションとして如何に完成させるかが、当時の芥川の課題であった。

「手巾」の完成度を考えると、確かに成功していない。文明批評として考えれば、もちろん物足りない。

しかし、芥川の狙いは、武士道の批判だったのだろうか。本論を通して考えてみて、私には武士道批判というよりは、武士道精神とキリスト教精神との合致を楽観的に信じ、一般化、訓話化してしまう、コスモポリタニズムの自信に満ちた「先生」に対する皮肉であるように思われた。多くの人々に支持されているからといって、盲目に信頼するのではなく、疑問視し、捉えなおす。それを、フィクションと

して完成させ、時には競作として楽しんでしまう。このように捉えれば、「手巾」は、いかにも芥川をはじめとする大正の文壇を象徴し、これから挑戦しようとする意気込みが感じられる一篇だったと考えられる。

もちろん、この頃の芥川は、言葉が作意通りにいかないことに試行錯誤しても、諦めてはいない。言葉による堅固な虚構空間を構築するのに敗北を感じるのはもっと後年になってからである。

注

- (1) 引用は関口安義編『芥川龍之介研究資料集成』（日本図書センター）による。
- (2) 大正五年二月十九日付芥川宛の書簡。引用は『夏目漱石全集』（岩波書店）による。
- (3) 府立三中の一年先輩堀内利器のこと。
- (4) 大正五年八月三十一日付陸山金左衛門宛の書簡。
- (5) 大正十三年六月十日、東京高等師範学校付属小学校講堂で行われた全国教育者協議会での講演で、「私が高等学校に居りました頃、校長は新渡戸稲造氏で、同氏の倫理の講義を聴きましたが」とある。
- (6) 大正五年三月二十四日付恒藤恭宛の書簡にローレンスの死と葬儀参加を告げる言及がある。

- (7) 「母」の本文の引用は『久米正雄全集』（平凡社）による。
- (8) 浅野洋「手巾」私注」参照。初出は『立教大学日本文学』第五十一号昭和五十八年十二月。ただし引用は『芥川龍之介作品集』第四卷所収（平成十一年）による。
- (9) 「母」の主人公名は、初出「新思潮」（大正五年八月）では「長谷部博造」であり、「久米正雄全集」では「矢田部博造」と改められている。

(10) 引用は岩波文庫の矢内原忠雄訳（昭和十三年）による。以下の「武士道」の引用も同じである。

- (11) 吉田精一「芥川龍之介」（三省堂 昭和十七年）参照。
- (12) 片岡良一「芥川龍之介」参照。初出は『芥川龍之介』（福村書店昭和二十七年）。ただし引用は『片岡良一著作集』第九卷（中央公論社 昭和五十五年）による。
- (13) 三島由紀夫「解説」（角川文庫『南京の基督』所収 昭和三十一年）参照。

(14) 海老井英次編『鑑賞日本現代文学⑩芥川龍之介』（角川書店 昭和五十六年）参照。

(15) 三好行雄「仮構の生——大川の水」をめぐって」参照。初出は『現代のエスプリ』昭和四十二年三月号。ただし引用は『芥川龍之介論・三好行雄著作集』第三卷所収（筑摩書房 平成五年）による。

(16) 磯貝英夫「手巾」（『國文學』昭和四十七年十二月）参照。

(17) 注（14）を参照。

(18) 注（8）を参照。

(19) 笠井秋生「手巾——武士道と型」（『芥川龍之介作品研究』所収 双文社出版 平成五年）参照。初出は『芥川龍

之介『手巾』について」という題目で『日本近代文学』第三十集昭和五十八年十月。

(20) 引用は『芥川龍之介研究資料集成』による。

(21) 引用は『芥川龍之介研究資料集成』による。

付記

「手巾」の本文、「武士道（小品）」の本文、芥川の手簡の引用は、『芥川龍之介全集』（岩波書店）による。